



滑魯

夢輔譚

編

上

13
3761
4



爰輔譚二篇序



又布屋

世乃諒よ。聖人せいじん夢見ゆめみと云いふ之の夢ゆめ。

多毛周たごしゅう公こう見み孔夫子こうふつし曰いハ常とこ不ふ

夢ゆめをかうてのひにいつとや思倭や植を種を也也。

おやくおやく多たはた夢ゆめ見みの凶を嘆せらは何れ摸枕まくら

善よ也也申まう矣し駒こま名な爰ゆめ子こ吉きち海うみのおひ連也也。

馬カニ編一

三六二

一

摸もふふととのの物もの各おのづか従したが来り爰こゝ、あ我われ貌かたちのの影かげ之を。
 眼め不た遮さ、ま身み聽き不た隨したがて、あ心こゝろ欲ほし、あ煩わづら悩なや絶たず。
 皆みな是これ心こゝろ神しんのの勞つとめあり、あ勞つとめとも不た時とき、あ後あと。
 爰こゝがあ當あたれ、あ爰こゝ知しせ、あ多おほくあ思おもひ、あ夢ゆめ想さうと
 言いふふむむささのの心こゝろとも當あたり、あ多おほくあ以もつてあ智ち育よくの
 爰こゝ形かたちをあ又またど、あ聲こゝろはあ爰こゝ不た聲こゝろをあ聞きんんば

此この理りをあ論ろん之を、あ蓮れん花げ香か、あ枕まくら中ちゆう記きのの一いつ篇ぺんあり。
 亦また枕まくら中ちゆう之を紀き、あ爰こゝののままどど毎まい夢ゆめのの後あと世よとも悟さと。
 覺さ時とき、あ唯ただ假かり寐み乃なり夢ゆめのの如ごとし、あ又また其その夢ゆめをあ。
 通と曉あきよよ玉たまれ、あ清きよ智ち洒しや落らく乃なり串くわん戲ぎ、あ又また是これ。
 勸すす善ぜん懲ちやう惡あくのの一いつ端たんあり、あむむ、あ駕かよよ若わかくあ夢ゆめ。
 補そ譚たん、あ敗さい元げん幸きやう、あ不た覺さとも二に度ど、あ病やま後あとの

催促さいそう。初はつ夏げかぬ宝船たうげふねのちゆくは祥瑞さいごう

とど。と。女めの睡ねり皆みな月つき覚さる。さる。氏うぢ市いち敷し

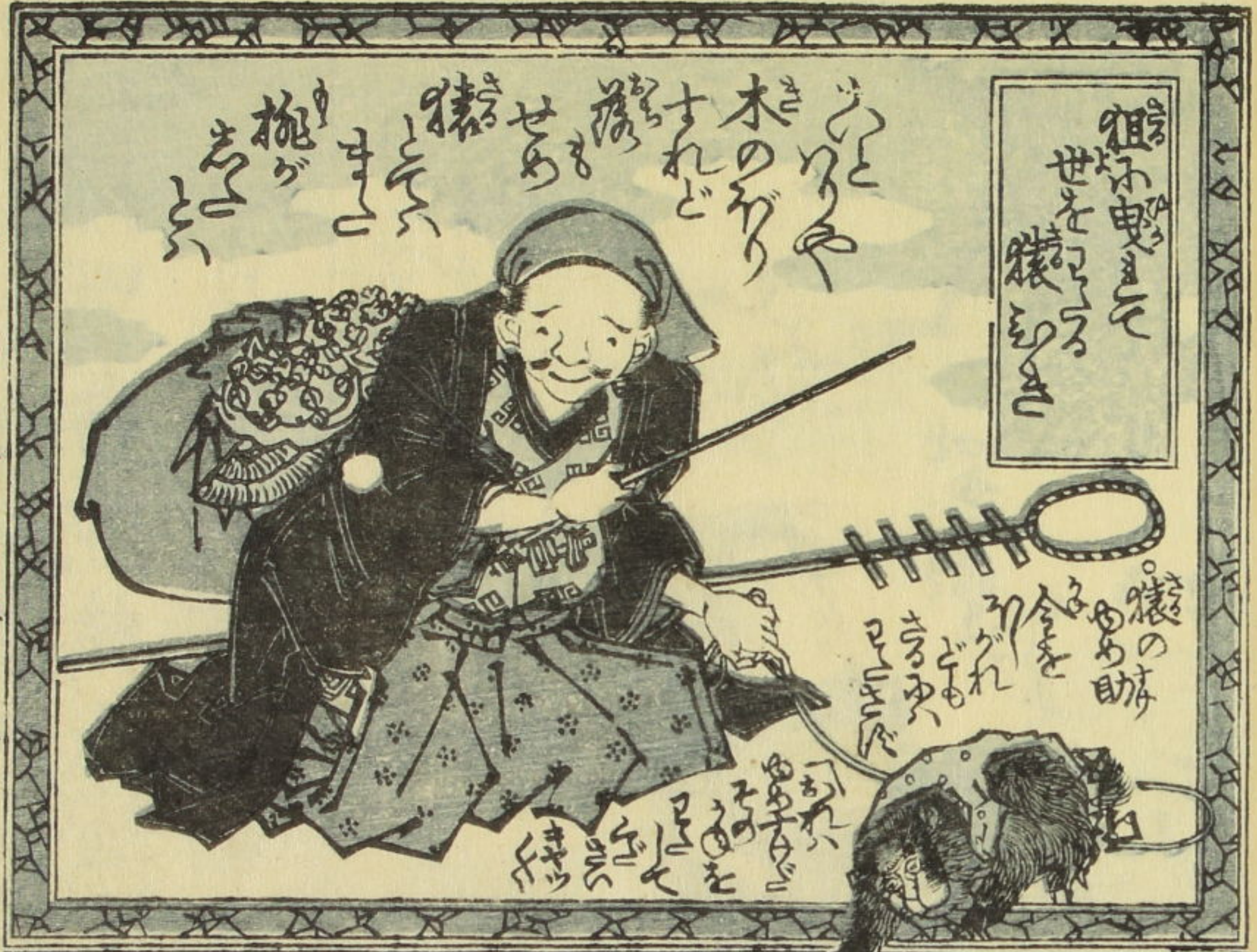
澤山さわさんふ。鬮ひ篇へんの寤寐ねどを斯かくの必かならずと志こころう云

維時いじ弘ひろ化か二年にふた己おの己おの次つぎく。晚ゆふ春はる餅もち極ごく乃

東都とうと楓川かえがわの市いち隠ひそ

一筆いちふで茶ちや井い主人しゆじん戲誌ぎし

第だい一いち



多口 百禽啼後人皆喜 惟有鴉鳴事若何
 傷人 見者多 詈聞者唾 只為人前口嘴多



ろくろつてふ
 舌の
 の
 の

の
 の
 の

の
 の
 の



敵を退く武士の
 達人
 千文の
 サアおん
 一
 金
 敵を
 めんて
 の



花小うられて
 酒小呑る人
 酒後者花
 情不厭花前
 酌酒意尤佳

一筆菴主人新著目録

文溪堂發販

俗談 浮世長家

每編三冊

俗談のありさまをまのあたりに
浮世のありさまをまのあたりに
情態を説くところのあり

教訓 滑稽 稽古三味撰

三冊

神佛の三教をうち交へたる
世のありさまの心づかひ
幸ひも酷いあまのひの
ふ調子をひらき
の稽古所ハ男女別ある
ハ小喜怒哀樂の串敷滑稽

後編 其繼 棹

三冊

世の中人の心づかひ
おしこまのあまのひ
ところのありさま

善悪 見手嘉之話

三冊

善悪のありさま
おしこまのあまのひ
ところのありさま

魂膽夢輔譚 二編上之卷

江戸 一筆菴戲作

福ハ禍の倚る行ハ福の伏する行ハ七喜ハ八憂
悲し生を悲しと尽て喜ひ生を盛る時ハ衰へる期あり
富ハ貴なるも誇るに足らざるも憂るべし
富の際ハ惑いごとく天令せ樂しむのハ如命の運者と
いふは富る者も松林の限りるまハ浮世の人の情状也
富のあまのひを看せしむるも貪りしむる煩悩を酒飲杯

いらして味ひなく肴数種ひまび美味と思ふを思ふ王を知らぬ
 者へ生薩親の有ぐまを思ふを患難辛苦と欲く浮
 世の夢が覺まぶ後の後が先へ至て後悔をうまると分別が
 出て七親が疾しくより遣りし金が吝くより病が金使て
 妙美と知り災難ひあひて運が強うるは合を脱び難
 考が壊て常の喰へ米の飯の程のりを曉る忠恕の乃の
 入のうんと思ひながらも突色めらるるま修の君痛を行
 彼夢助の福深壽星の秘呪を得るを教諭と悟るま

獲ふりふ三ツ兒の魂百ままと性災する致公漫くり次魂
 脆まむも栄曜栄花ひ有付りと浮世の不外温座を
 小麦の粒と思ふが如き白痴と了芳うるゆあ人の落し
 金を拾ひて本残のは板と尋る類ひ者度もろふ魂を
 まづは猪の福とより忽ち小判一両の損をなす纏帯を
 と取らんとしてまろくふ鼻づくとをまろくは割き居る居
 所ふまごつし鶴鶴とよりて八妻安ん住して身ハ三百両の
 售しまても大骨おりて奪ひ撥く鳥屋の徒儂とより

のこころごとく我身の利徳とほびごとく後来勉勵の基淺のなる
 西の國の大守とあり馳て留貴の脆んとて熱く魂と
 入替れども思入の傍て敷さぬほど世の窮乏なること
 一好む相陽の送入をまねば近き唇後の作消さむの
 心當の居月身入身の深さなる迷惑さし陰長の煙を松
 ささぎてと相隣のどく熱意の薩大芋のどく三度の飯も
 給はぬ氣がさけけ片肌脱で大びぐら黄齋まごらの刺
 身を肴のみ合極る獨樂もさねば物々の候く尻と

一ツ放る氣散トさ入自由なるぬ行義作法の見ても
 氣よまる八重山吹の黄金の山でも実なるもの
 稀るまば是彼ともみぬさるむらり儲もくと歎息
 是はくくとむらり鼻の穴とやんくと指でゆきとが痔
 痰の敷さぬめせめてくらりと思ひ出ぬ美業奥さぬと
 枕をたて楽しきんと胸兼用も杉をたがして此程時
 候の持病あつり心体息ぬお泊の鈴の廊にも音絶
 たりあるはも月並の涼りの宵のお夜詣のまお限の

夢野護二編

七

獨寐の室の山入るるに
 寐返りの初まを思ふ甲斐なげまば
 金銀ひそくふくころを工風ぬ
 後て道習及尾花志忠太を
 殿中にて推参ありて
 手紙珠簀物を所持するものより
 子西つとて一巻の巻物に
 せしむる意ありけり

此直書にて時時の急便を
 栗九郎の思ひまじる様念の
 末せくは持主人の池とく
 金二子西とのりゆりの目
 度となく探返しく拾ひよ
 俱ふる妻へ志きりけり

妻田話二編上

三



面々嘆々
過あまく
侍さむらい 臣おん 小こ
場ば 寸すん

座浦ぬ通ゴト一おまち此ち有ひ忠や太かへん次ぎのら者い通き造つ一と茶ち養や食じ

菓子かしあかまて出いけいしら粟あ九く弟てい八はち度ど産さん妻つまあかひひ人ひとてけ信しん外がい信しん

アアととままままままままろろくく旅たびちちわわるる小せう倭わにに立たてたてたてたてたてたてたてたてたてた

より五六才うしご位のゝ男おとこのら兒こ完かん本ほんとと笑わらひひろろくく頬ほとと頬ほとと頬ほとと頬ほとと頬ほとと頬ほとと

より粟あわ九く弟てい退たい屋やのらちちままうう赤あかららるる菓子かしよよととををととををととををととををとと

えんえん愛あいへへああわわるるせせんんトト

モウモウ一いちととららへへああわわるるせせんんトト社しゃのらととああわわるるせせんんトト赤あかいいのらわわるる

ちちのら中ちゆうのらままのらめめのられれととのら目めのらつつままけけのらゆゆとと粟あわ一いち粒りつああひひささんんトト

ああんんままああんんままああんんままああんんままああんんままああんんままああんんままああんんまま

ああんんままああんんままああんんままああんんままああんんままああんんままああんんままああんんまま

ああんんままああんんままああんんままああんんままああんんままああんんままああんんままああんんまま

栗くり一いち分ぶんリリトト退たい屋やででままををままををままををままををままをを

ああんんままああんんままああんんままああんんままああんんままああんんままああんんままああんんまま

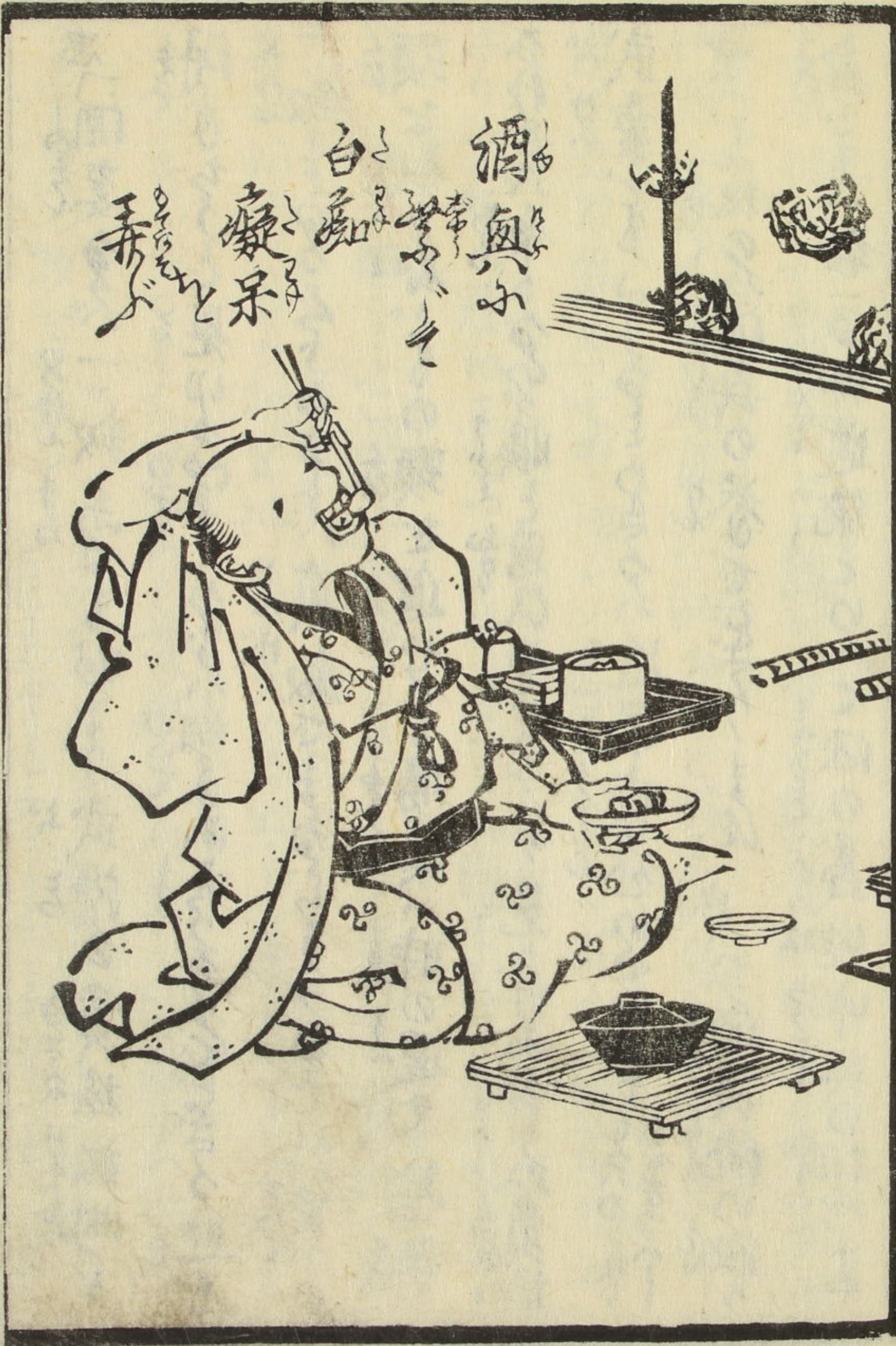
その道具たうぐ屋やはは栗くり九く弟ていどどのらここううナナ今いま日ひハハ遠とほ方はたハハ苦く勞らう

びんぎの式取らるゝ女の官女が平け人物を作りま
 ことやまきと奢備清久一くまきとゆひ一まはる備清の
 秘づり物とて人の取しも其のまはるは全体平け人の
 がうらハまきハ物で源氏物語ハびづりうらハことやまきハ源氏
 平家の遠でもとせし一も源氏ハ別ハうらハびづりうらハと見へ
 まは平家ハ公家で上方才六うらハ余いのを能とまはる
 そのうら根まがうらまきとせし一まはる一思ハ是ハ面白
 一ナ其源氏ノ祝言くハとドヤまき歌も懐きやうう

吟ぐとてうらハ羨りしむせエス 粟ハ櫻とて中ハゆり舟を採で
 道順ハ時花ませぬ 思ハさうとナ此方のゆハ古今万葉の
 古ハ振が能テ 粟ハ古今ハ能でとせし一まはるハ今ハ
 彦根小離ハ事き清でとせし一まはる 忠一セまはるナ影歌の
 古ハ江洲が能テナト 思ハまはるハのナとてまはるく思ハ太がくハ
 粟ハ且那わらハ古ハ頃が好みでとせし一まはるハ此
 昔のうらとせし一まはるハ一ハ二度でも妻あり傘ヨ

Handwritten text in a cursive script, possibly a mix of Latin and Japanese characters, with some annotations in smaller characters.

Handwritten text in a cursive script, similar to the right page, but with a mix of Latin and Japanese characters, including vertical annotations.



忠一酒妻多バ一ツ釵赤るもいまる武滑な貴根扱御ら
 侍もちうと見ゆる望もるも相もみあつるでござる進も
 一釵まかりくわなるも真釵でまかりうてまされが望下の
 頭を取り身どもの頭を進せり勝負ハ時の運ちりハ
 多り見だ令うるの恨と思ひわするテ見りけふもぬ貴根
 武藝ども一ツさるも近頃感心らしたト
 乗一上私ハ酒具の巻でござるまは忠一酒具流の扱
 身どもハ較る神道流とりて派の義燈仲興の相傳どや

上泉信綱の新法流と二流を合せて新法捷徑と名付一戸の
 竹内小野初生諸流の一流からとりて身ども流儀ハ神
 道の太刀筋をスレや乗一上私ハ太刀筋も道筋も
 ざりやせん悪ハとをや一まら酒をいひまはさる
 多々釵と扱と一七酒ふけるも夏も夫が多いでり當地で
 呑ふゆちるも指と伸屈て大變出り七唐書も多る松も
 さんてまらうてうるのどりも拳術も余ハ別業のけん
 多やうと扱とせぬらト

女中は透見を志せる女中も
 一を小ざらこころひ大おと
 九常賞さぬ爰へある時頭が
 一は小ざらこころひ大おと
 九常賞さぬ爰へある時頭が
 一は小ざらこころひ大おと
 九常賞さぬ爰へある時頭が

今頃が二三の見る其の者
 中がまうらりていさう
 一は小ざらこころひ大おと
 九常賞さぬ爰へある時頭が
 一は小ざらこころひ大おと
 九常賞さぬ爰へある時頭が

ての鼻へ校てとんと儚ううまの板の圓へるがさうへんども
 ええでも「あうう実だ」の「ト」
 ○却説殿さぬの夢助八粟九糸をほよを納戸金せまる
 ありて規を度さんと思ひの外碎割とありのそるうび顔
 房の強ぎひて差掛つてるの合む小敷園めちれて大急後
 東「ハイ」
 夢田の外の殿へ今日の日和がよひらト

「鶴と鳥持の村ませううト」
 子アノ勢がぬまをこく「粟」
 舌を出し「東」
 ぐ「ち」
 ち「の」
 務を浮電「ト」
 浮世の傳りぬ大の伝教が遠の先刻忠太「ト」
 武蔵の定日で先生が「あ」

夢田譜二集上

十五

場も明々として此方々の秋候の将尾より外まで
 又鎗術初術といつて茶木ハ霖雨の降る時禁め
 ざんと七かろが茶木ハお目出さとのみ工を朔日十五日廿八日
 かうさまでてまきく蜂の尻ふる針の初で男の半
 山池走あつちやうとるどとりあまり初らんこなる茶がこと
 殊の外逆上しとて登程と見へるとやうがき方
 見あがり 本一イとぶも山根子がお遠い根がまがとぞん
 登程梅溪日光蕃椒ハ金山寺賣が持てまかるで

逆上と夫子候のぎやう上着西の蕃椒取 本一
 山黄根がまきくやう山池走と見へる 本一
 南蛮瓜が唐茄子といふと茶と唐茄子野郎とあひ
 さうのみの本一はりやうて実の些山池走とぞん
 殿へるむとアノ忠太とよ尾花志忠太が漸の仲で丁
 ト 本一の忠太とよ尾花志忠太とよ尾花志忠太とよ尾花志忠太
 其納戸金六有ゆを志のてなるま方の樹り
 二子面をの持せて山み出ぬがなるまはり 忠一

豊田譜二編上

長力軍二角七



舞踊

七

うりやせぬ山蒸ハ一両日金根のこまごり山蒸程一やんまおんが
こまごり 遠のち一こまごりまはん毛まほのひをどぶるまほまほまほ
まほ 左極でどぶるやん 極ハ遠のめが鏡が遠のて居るのよや金と
まほ 又金や世の中の金やどよ山物の金まほ好がやま方は落
まほ 好でいさう二入山登でどぶるやん 極ハ金が好がや金が欲い毛
まほ だどよ山物の金のトなくまるる 金がまほが好がではる金は
まほ くら小紋の漆てお山物の金をまほがまほが一と一と社か似合好が一
まほ やせり 忠ハお山登は二一とゆ一ひぐりまほとハらどぶる

ままうナ 極ハ毛もよ山登のあやが板の中ハ入るト
まほ 大なる殿さぬハ作つまよ山門かへひや一と町人の体のてま助と
まほ 中のの當山金のの殿さぬありとりとり一と門番屋にまほが判一
まほ けりてもわも園入ままほが二三月以来途中の放て供の者の
まほ 捨て置ぬとままほが戻りとま関より居間一通とままほが書
まほ 方の思慮さぬのかまほが相違とままほがまほが金く種のの賤い者
まほ 極も捕り獄を入らまほがまほがまほがまほがまほがまほがまほがまほがまほが

ゆめ助を 一サマシウ〜 夢をまませうらう〜 夢と獄をへ

ゆめ助を 夢をまませうらう〜 夢と獄をへ

ゆめ助を 夢をまませうらう〜 夢と獄をへ

ゆめ助を 夢をまませうらう〜 夢と獄をへ

ゆめ助を 夢をまませうらう〜 夢と獄をへ

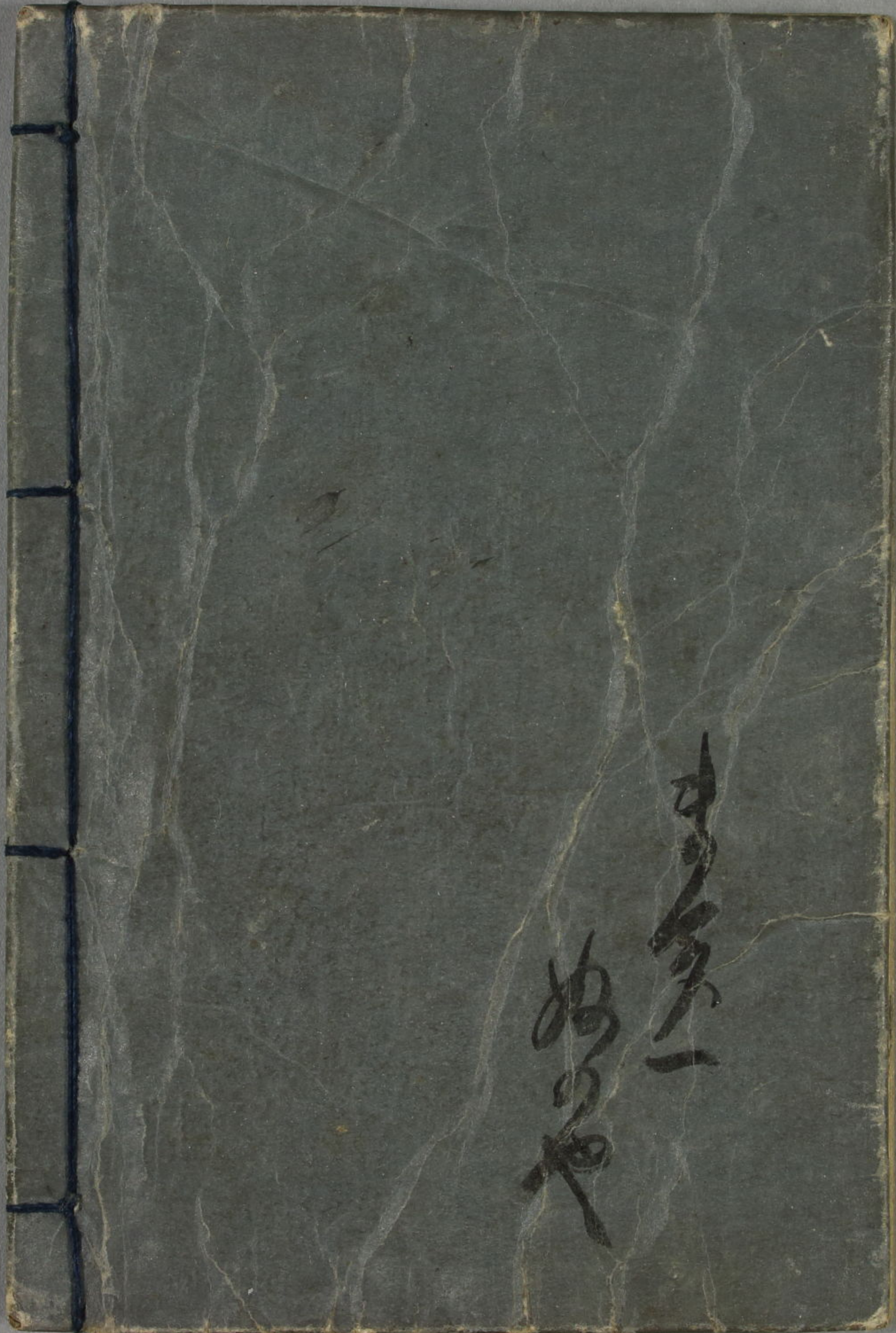
ゆめ助を 夢をまませうらう〜 夢と獄をへ

ゆめ助を 夢をまませうらう〜 夢と獄をへ

ゆめ助を 夢をまませうらう〜 夢と獄をへ

ゆめ助を 夢をまませうらう〜 夢と獄をへ

又布屋



中
の
一
冊
の
本